

金沢大学法学類 定期試験解答・解説

授業科目名	法理学 A	2025 年度 : 3Q	
		定期試験期間外	
担当教員名	足立英彦	試験日・時間	11 月 24 日 (月) 10:30 ~ 12:00

1. つぎの推論は妥当か、タブローを使って説明しなさい。妥当でない場合は反例も示しなさい。(各 5 点)

(a) $\neg A$ ゆえに $A \rightarrow B$

解答 妥当

$$\begin{array}{c} \neg A \\ \neg(A \rightarrow B) \checkmark \\ A \\ \neg B \\ \otimes \end{array}$$

(b) $A \rightarrow (B \rightarrow C)$ ゆえに $A \rightarrow (C \rightarrow B)$

解答 非妥当。反例は A 真、B 偽、C 真の場合。

$$\begin{array}{c} A \rightarrow (B \rightarrow C) \checkmark \\ \neg(A \rightarrow (C \rightarrow B)) \checkmark \\ A \\ \neg(C \rightarrow B) \checkmark \\ C \\ \neg B \\ \swarrow \quad \searrow \\ \neg A \quad B \rightarrow C \checkmark \\ \otimes \quad \begin{array}{c} \swarrow \quad \searrow \\ \neg B \quad C \end{array} \end{array}$$

解説 反例が間違っている場合は 1 点減。

(c) $\forall x(Px \rightarrow Qx), Pa$ ゆえに Qa

解答 妥当

$$\begin{array}{c} \forall x(Px \rightarrow Qx) \\ Pa \\ \neg Qa \\ Pa \rightarrow Qa \checkmark \\ \swarrow \quad \searrow \\ \neg Pa \quad Qa \\ \otimes \quad \otimes \end{array}$$

(d) $\forall x(Px \rightarrow Qx), \exists xPx$ ゆえに $\exists xQx$

解答 妥当

$$\forall x(Px \rightarrow Qx)$$

$$\exists xPx \checkmark$$

$$\neg \exists xQx \checkmark$$

$$\forall x \neg Qx$$

$$Pa$$

$$Pa \rightarrow Qa \checkmark$$

$$\neg Qa$$

$$\begin{array}{c} \diagup \\ \neg Pa \end{array} \quad \begin{array}{c} \diagdown \\ Qa \end{array}$$

$$\otimes \quad \otimes$$

2. つぎの論理式は恒真か、タブローを使って説明しなさい。(5点)

$$((A \rightarrow B) \wedge (B \rightarrow C)) \rightarrow (A \rightarrow C)$$

解答 恒真

$$\neg(((A \rightarrow B) \wedge (B \rightarrow C)) \rightarrow (A \rightarrow C)) \checkmark$$

$$((A \rightarrow B) \wedge (B \rightarrow C)) \checkmark$$

$$\neg(A \rightarrow C) \checkmark$$

$$A \rightarrow B \checkmark$$

$$B \rightarrow C \checkmark$$

$$A$$

$$\neg C$$

$$\begin{array}{c} \diagup \\ \neg A \end{array} \quad \begin{array}{c} \diagdown \\ B \end{array}$$

$$\otimes \quad \begin{array}{c} \diagup \\ \neg B \end{array} \quad \begin{array}{c} \diagdown \\ C \end{array}$$

$$\otimes \quad \otimes$$

3. つぎの文章は、否定 (\neg) の意味を説明したものであるが、表現としては不自然である。内容を変えずに、より標準的で分かりやすい形に書き換えなさい。(3点)

「 $\neg P$ は、 P が真であるとき、またそのときにのみ、偽である。」

解答 $\neg P$ は、 P が偽であるとき、またそのときにのみ、真である。

4. つぎの文章をそれぞれ、(1) 全称量化子を含む論理式、(2) 存在量化子を含む論理式、及び(3) 述語論理のベン図 (Venn Diagram) で表現しなさい。ただし、「～は学生である」という述語を S とし、「～は法理学を学ぶ」という述語を L とする。(12点)

(a) すべての学生は法理学を学ぶ。(All students study Jurisprudence.)

解答 (1) $\forall x(Sx \rightarrow Lx)$ (2) $\neg \exists x(Sx \wedge \neg Lx)$ (3) 省略

解説 「～法理学を学ぶ」という述語を "J" とすると書いたつもりが "L" になってました。
失礼しました。

- (b) 法理学を学ばない学生がいる。(Some students do not study Jurisprudence.)

解答 (1) $\neg\forall x(Sx \rightarrow Lx)$ (2) $\exists x(Sx \wedge \neg Lx)$

- (c) 学生は一人も法理学を学ばない。(No students study Jurisprudence.)

解答 (1) $\forall x(Sx \rightarrow \neg Lx)$ (2) $\neg\exists x(Sx \wedge Lx)$

- (d) 法理学を学ぶ学生がいる。(Some students study Jurisprudence.)

解答 (1) $\neg\forall x(Sx \rightarrow \neg Lx)$ (2) $\exists x(Sx \wedge Lx)$

5. つぎの文章は正しいか。正しければ○を、正しくなければ×を答案用紙に書きなさい。×の場合は、何が（どの部分が）誤っており、どう修正すれば正しくなるかも説明しなさい。
(各 2 点)

- (a) 実定法学、法制史学、外国法学の共通の問は「何が法か？」（何が日本・外国の法であるか、あったか？）であり、法理学の課題は「法とは何か？」である。

解答 ○

- (b) 「法科大学院を卒業した者または司法試験予備試験に合格した者は司法試験を受験できる」の「または」は排他的選言である。

解答 ×

誤：排他的選言 正：非排他的選言

- (c) $A \rightarrow B$ は、 A が偽であるか、または B が真である場合に、またその場合にのみ真である。

解答 ○

- (d) 反例のない推論を健全な推論という。

解答 ×

誤：健全 正：妥当

- (e) 非整合的な集合から任意の命題を論理的に導けることを爆発原理と呼ぶ。

解答 ○

解説 非整合的な集合と矛盾集合は同じである。

- (f) 「 A ならば B 」という命題が恒真であるならば、「 A ゆえに B 」という推論は妥当である。

解答 ○

- (g) 可能世界は完全であると想定されるので、任意の命題 X について、どの可能世界においても、 X か $\neg X$ のどちらか一方は真である。

解答 ○

- (h) 命令（作為の義務）、禁止（不作為の義務）及び自由は互いに「否定」の関係にある。

解答 ×

誤：否定 正：反対

- (i) 言論の自由が認められていなければ、言論（をすること）は禁止されている。

解答 \times

誤：言論（をすること）は禁止されている。 正：言論（をすること）は禁止されている、または義務付けられている。

- (j) 現実世界において規範 OV が真であるのは、現実世界にとっての理想世界のうち少なくとも一つで V が真である場合であり、すべての理想世界で V が偽であれば OV は偽である。

解答 \times

誤： OV (2か所) 正： PV

解説 全文を修正し、「現実世界において規範 OV が真であるのは、現実世界にとってのすべての理想世界で V が真である場合であり、少なくとも一つの理想世界で V が偽であれば OV は偽である。」でも可。

- (k) 我々がこの現実世界 w において規範を定めるとき、我々は、通常は、 w よりも善い（理想的な）世界が存在することを暗黙裡に前提している。

解答 \bigcirc

- (l) 必然的なことは義務づけられている ($\Box P \models OP$)。

解答 \bigcirc

解説 この授業では、理想世界は可能世界の一部である（すべての可能世界は理想世界か非理想世界のいずれかである）と説明した。この前提の下では、到達可能なすべての可能世界で P が真であれば、到達可能なすべての理想世界でも P は真となる。したがって、問の正解は \bigcirc である。自然言語の直感で、たとえば「必ず雨が降る。ゆえに、雨が降らなければならない」という主張が不自然に感じられるのは当然である。しかし、試験では授業で示した、可能世界と理想世界の関係に基づいて判断してほしかった。

- (m) 法令が定める義務の多くは撤回不可能な義務 (non-defeasible obligation) である。

解答 \times

誤：撤回不可能な義務 (non-defeasible obligation)

正：撤回可能な義務 (defeasible obligation)

- (n) b が a に対して 100 万円を支払うことを義務づけられていなければ、a は b に対して (a が b に) 100 万円を支払うことを求める権利を有していない。

解答 \bigcirc

- (o) b が a に対して車を運転することを許されていなければ、a は b に対して車を運転しないことを求める権利を有し、車を運転することを求める権利も有する。

解答 \times

誤：a は b に対して車を運転しないことを求める権利を有し、車を運転することを求める権利も有する。

正：a は b に対して車を運転しないことを求める権利を有し、車を運転することを求める権利を有さない。

- (p) 社会権は、すべての人に対する特定の人の権利である。

解答 ×

誤：すべての人に対する特定の人の

正：特定の人に対するすべての人の

解説 「誤：社会権 正：物権」 も正解。

- (q) a が b に対して権限を有しない場合に、b は a に対して自らの地位の変更に従う責務を負わないという地位にある。この b の地位を、ホーフェルト (Hohfeld) は無服従 (免除) (immunity) と呼んだ。

解答 ○

- (r) 一方の法源の要件が他方の法源の要件より特殊とはいえず、かつ両者の効果が同時に両立しない場合の両者の関係を排他的規範競合と呼ぶ。

解答 ×

誤：排他的 正：択一的

- (s) 授権規範が制度的行為を「構成する」というのは、行為が存在するかどうか自体を授権規範が決めるという意味であり、行為規範のように既に存在する行為を規制するものではない。

解答 ○

- (t) 平均的正義は、すでに互いに「等しい」とみなされている二者の関係において、利益や負担を等しく配分することを求める点で、分配的正義の特殊な場合だとみなすことができる。

解答 ○

- (u) 分配的正義は、どのような「価値」を基準に誰を「等しい者」とみなすべきか、また、その等しい者たちをどのように扱うべきかという内容面についてまで決定する原理である。

解答 ×

誤：・・・内容面についてまで決定する原理

正：・・・内容面についてまでは決定しない原理

- (v) 比例原則のうち「必要性」は、目的達成に同程度に寄与する複数の手段がある場合、他の基本権などへの侵害がより大きい手段を、より強い抑止効果を期待して優先採用すべきだという基準である。

解答 ×

誤：他の基本権などへの侵害がより大きい手段を、より強い抑止効果を期待して優先採用すべきだという基準である。

正：他の基本権などへの侵害がより小さい手段を優先採用すべきだという基準である。

- (w) 法解釈の際に追加する前提是、語の可能な用法でなければならない。

解答 ○

- (x) 立法者意思に基づく論証とは、歴史上の立法者の実際の意思を論拠とする論証である。

解答 ○

- (y) 発展的法形成とは、制定法が含みうる意味内容の範囲を超えて、かつその文言と両立する一般法規範を裁判官が形成することであり、反法律的 (contra legem) 法形成もその一種である。

解答 ×

誤：・・・超えて、かつその文言と両立する一般法規範を裁判官が形成することであり、反法律的 (contra legem) 法形成もその一種である。

正：・・・超えて、一般法規範を裁判官が形成することである。

6. 立法行為と行政行為を、制度的行為の観点から共通点と相違点を挙げて説明しなさい。(5点)

解答例

共通点：立法行為と行政行為は、ともに授権規範に基づいて成立する制度的行為であり、授権規範に基づいていなければ、立法機関や行政機関が定める「規範」は、たとえ文言上は規範の体裁を取っていても、その国の法体系に属する法規範とはみなされない。

相違点：立法行為は、国民によって選ばれた代表から構成される国会が、公開の議論を経て行うものであり、国会が制定する法律には国民総体の（間接的な）同意が与えられているとみなせる。この国民的同意を前提として、憲法は国会に規範創造権限を付与している。これに対し、行政が定める規範には国民的同意が与えられているとはみなせず、憲法も行政に立法権限のような規範創造権限を付与していない。したがって行政には、法律の授権の範囲内で一般規範（政令・省令）や個別規範（行政行為）を制定する権限、すなわち規範解釈権限のみが認められ、国会のように新しい規範を創造することはできない。

解説 共通点に 2 点、相違点に 3 点。行政は法律に基づき命令（政令・省令）という一般規範を定めることもできるので、法律は一般規範で行政行為は個別規範であるという相違は、その通りではあるものの、あまり本質的でない。

7. 判決などの個別規範が「論証された」と言えるために必要な 3 つの条件を挙げ、それぞれを簡潔に説明しなさい。(5 点)

解答例

判決などの個別規範が「論証された」と言えるためには、次の三つの条件が必要である。第一に、個別規範が論理的推論の結果であることが必要である。個別規範は理想世界を記述する規範命題であり、現実世界との対照によって真偽を判断できないため、それ自体を直接に論証することはできない。他の前提から論理的に導かれる場合にのみ、その真理性を論証できる。第二に、推論の前提に少なくとも一つの条件つき一般規範が含まれていることが必要である。平等原則（「等しき者を等しく扱え」）に従うためには、同じ要件を満たす者に同じ効果を与える条件つき一般規範に基づいて判断しなければならない。そのため、推論の前提

には必ず条件つき一般規範が含まれている必要がある。第三に推論の前提となるすべての命題が真であることが必要である。前提に偽の命題が含まれていれば推論は健全でなく、結論の真理値も確定しないため、条件つき一般規範と、必然的な事実に関する命題の真理性の証明が必要となる。

8. この授業に対する感想、意見、改善提案等を書いてください。(任意)

回答 練習問題の解答をもっと早く公表してほしかったという指摘がありました。WebClass にアップロードするのを完全に忘れていました。申し訳ありません。

以上

参考情報 (2025 年 11 月 26 日現在)

● 定期試験結果

履修登録数	定期試験受験者数	放棄	定期試験平均点
13		2	75.6
		S(100-90) A(89-80) B(79-70) C(69-60) 不可 放棄	
1 4 2 4 0 2			

定期試験上位得点者: 100 点 1 名。

- 上記の他に、法学・政治学専攻の院生 1 名と研究生 1 名が聴講した。